

○ 矢倉 紀子 廣江 かおり
 (鳥取大学医療技術短期大学部看護学科)

【目的】排泄自立に関連する要因として、躰開始時期、躰方、おむつの種類、母親の養育態度、便性、便通などとの関連性について分析し、円滑な排泄自立をすすめるための方法を検討し今後の保健指導に役立てることを目的とした。

【対象と方法】対象は鳥取県米子市において、平成3年度に実施された三歳児健康診査の受診者男児513名、女児563名の1076名である。方法は対象者の保護者に対して、事前に調査用紙を郵送し、健診当日会場で回収(回収率68.5%)した。

【結果】1 排泄自立状況：便意、尿意を自覚し、排泄行動をとることのできる完全自立者は男女とも50%前後であり、予告できない小児が3.9~15.9%いた。一方、予告も告知もできない全く無関心な小児が男女とも1%前後いた(図1)。

2 排泄の躰方法と排泄自立：排尿の躰を排便より先に開始した群の自立率が有意に低かった(図2)。

3 躰の開始時期と排泄自立：開始時期が遅い群ほどその自立率が低い傾向にあり、とくに25か月以降群が有意に低かった(図3)。

4 使用おむつ別の躰開始時期と排泄自立：紙・布・併用群それぞれの躰開始時期は紙群が有意に他の群に比較して遅く(図4)、排泄自立率も有意に低かった(図5)。

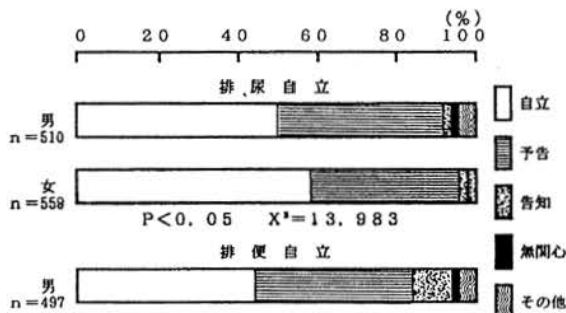


図1 性別排泄自立状況

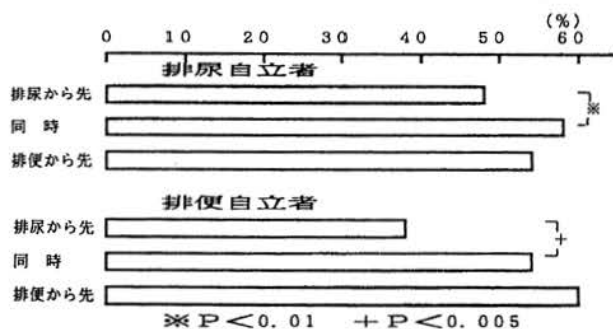


図2 排泄の躰方法別の排泄自立率

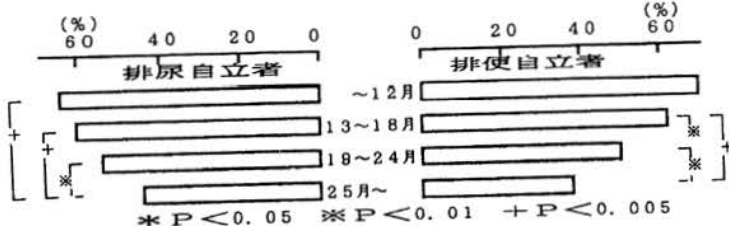


図3 躰開始時期と排泄自立

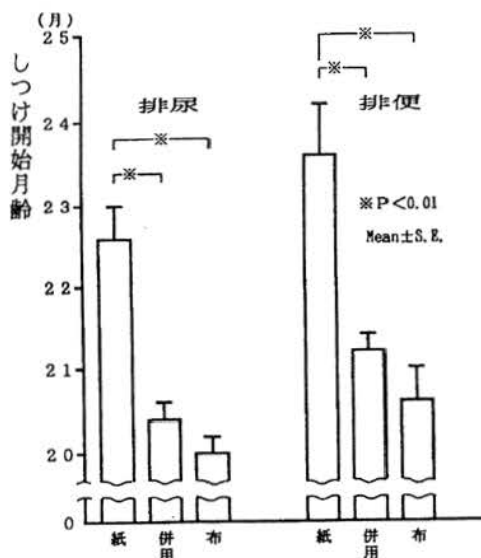


図4 おむつの種類別躰開始時期

5 便性・便通と排泄自立：便の性状を硬・普通・軟に区分し、また便通により排便自立率を比較すると普通便で毎日1回以上便通のあるいわゆる便秘や下痢傾向にない群の自立率が高かった（図6）。

6 排泄失敗時の母親の気持と排泄自立：排泄失敗時にどのような気持を母親が抱いたか否かでその自立率を比較すると、「あせった」「不安だった」と感じた群の自立率が有意に低かった（図7）。

7 母親の育児観と排泄自立：育児に対する母親の態度により比較すると、肯定的な育児観を持つ群の自立率が高かった（図8）。なお、この他に母親の年齢・学歴、家族形態、昼間の保育者、出生順、出生季節などとの関連性も検討したが、有意な関連性は見い出せなかった。【考察】排泄の躓は小児の身体的、精神的成熟が先行条件となることはもちろんであるが、小児の排泄欲求をいかに抵抗のない形で引き出し、行動化させるかである。このような観点から、躓る時期は自我の発達が目覚ましく抵抗が激しくなる2歳迄に、しかも肛門括約筋の成熟が膀胱括約筋に比較して早いこと、排泄欲求を母親が読み取りやすいことなどから排便から先に躓った群、さらに排便を予測しやすい規則的便通者に自立率が高かったと考える。しかし、排便から先に躓っている母親は少数であり今後保健指導上考慮すべき点である。母親の養育態度が微妙に影響していることも推察でき、母親が小児の排泄自立過程を安定した気持で受け止め対応していけるような指導が必要である。また、紙おむつ群の自立率が低かったが、これはすでに報告されているように交換頻度など使用上の問題と考える。

